

英語の「ラケット racket」の語源は、アラビア語の「手のひら」を意味する rahah (ラハ)とされています。現在では、ボールやものを打つものを「ラケット」と呼んでいますが、フランスの「ジュ・ドゥ・ポーム」も最初は、手で打ち合っていたことから、現在使っている「ラケット」は、手の分身だと考えることができます。

「ジュ・ドゥ・ポーム」に似たボールゲームに、フランスでは「バロン」という遊びがありました。この絵では右腕につつのようなものをまきつけて、ボールを打っています。ボールと言っても、当時は、ゴム製品ではなく、多くは、中につめものをしたかわぶくろでできていました。それで打つと痛く、長い時間打ったり、強く打つのがとても困難でした。そのために、腕を保護するための防具として、つつの形のようなものや、かわひもをまきつめたものが考え出されました。これが、ラケットの始まりとなります。この発明によって痛さからのがれられ、長い間ゲームを楽しめるようになりました。－①



フランスで行われていたバロン

次に考え出されたのが、取り外しがかんたんにできるように、グローブ型のものが考え出されます。グローブ型になることにより、打つだけでなく、受け取ることもできるようになったのでした。－②

さらに、ボールを遠くにとばせるように、木の棒③（これは、ゴルフやクリケットにつながります。）、板④などが発明されます。バトワール④は、せんたく物をたたく木のへらで、一枚板をけずって作られた物でした。

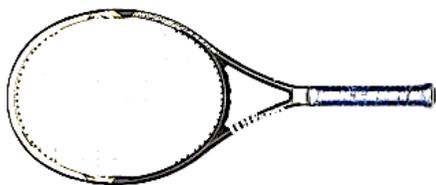
- ①  かわひも
革紐を巻きつけたもの
- ② 
グローブ形式のもの
- ③ 
木の棒
- ④ 
バトワール
- 
バトワールの改良型

1555年、ガット(羊の腸)が張られることにより、今のラケットに近い物になってきます。これは、画期的な発明でした。まず、ボールがよくはねる、ふっても空気の抵抗が少ない、打った時のしょうげきが少ない、そして、何よりも軽い。このような利点があったのでした。ガットを使うラケットは爆発的な人気を呼び、「ポーム」は、「手のひらで行うゲーム」から「ラケットで行うゲーム」へと変わったのでした。

素材でいえば、現在テニスラケットに使用されているのはカーボンが主流ですが、元々はスチールやアルミ製でした。

1967年にスチール製、1968年にアルミ製、1974年になってようやく複合素材のラケットが登場します。

変則的なラケットの登場を防ぐために、今では、ラケットの全長、幅などの上限が決められています。



現在の一般的なラケット

